

藤原光頼

——軍記物語の「有職の人」——

宮川裕隆

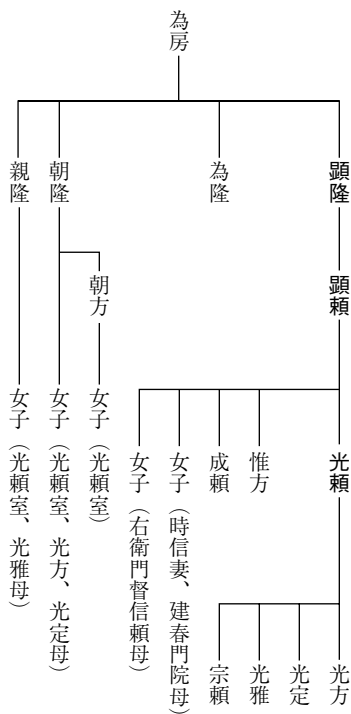
はじめに

平安時代において摂関政治という形態が存続したのはいうまでもなく、自家の娘に皇子が誕生し、その子が即位し、天皇の外祖父として実権を握ったからに他ならない。しかし、摂関家を外戚としない後三条天皇が即位したことにより摂関家の地位は凋落していく。天皇とその実母を見ると、白河天皇は母は権大納言藤原能信の娘、実際は権中納言藤原公成の娘、茂子。堀河天皇は母は藤原師実の娘であったが、実は村上源氏源顕房の娘であり、鳥羽天皇の母は藤原実季の娘、苅子であった。後三条、白河、堀河の三人の天皇の中で、摂関家が外戚として存在しえたのは、堀河天皇だけであり、それすらも養女という形であったため、摂関政治が行われていた際のような政治権力の集中は困難であった。こうした中で政治の実権を握ったのは男系の家長である上皇である。特に白河上皇は、堀河天皇を八歳で即位させ、二九歳で夭折した堀河天皇にかわり、五歳の鳥羽天皇を即位させ、天皇が幼少であり、政治がとれないということから政治を行った。平安時代中期から後期にかけての摂関政治から院政への流れは、こうした女系

の外戚が政治を補佐していた形から男系の家長である上皇が政治を行う形への移行といえるだろう。ただ先に述べたようにこうした事態が摂関家の凋落を招いたのであり、一方でこれまで中・下流の貴族達が院の手足となり働くことで、また院の庇護をうけることにより力を握ってきたのである。いわゆる院近臣とよばれるものたちであるが、本稿ではその中で、藤原顕隆を始祖とする葉室流、特に藤原光頼について考察していく。

一 白河・鳥羽院政期における葉室家の役割

院政において近臣の役割を元木泰雄氏は、大國受領系近臣と実務官僚系近臣の二類型に分け、前者は収入の多い大國の受領を歴任し、経済面で院の活動を支え、後者は弁官、藏人、藏人頭といった実務官僚の重職を歴任し、すぐれた実務能力で院の政治活動を支えた⁽¹⁾とされた。その実務系官僚の代表が藤原為房を始めとする高藤流である。



系図は『尊卑分脈』による。但し、適宜系図を省略した。

為房、顕隆は当初摂関家に家司として近仕しながら、その優れた実務能力で白河院に重用され、徐々に院近臣としての働きをなしていった。ただ、彼らは院近臣としての役割にのみ終始したのではなく、このときは摂関家と院との結合という重要な役割を果たしている⁽²⁾。また藏人頭として天皇にも近仕している。そのなかで顕頼、光頼も含め、この一族が担った院政における役割は院に対する政治の奏上、すなわち奏事であり⁽³⁾、この一門が鳥羽院の奏上取り次ぎにどれほど関わったかは元木泰雄氏の研究に詳しい⁽⁴⁾。こうした役割が為房、顕隆、顕頼、光頼の四代に引き継がれていったのは、彼らの実務能力の高さがあったからであるが、一方で右の系図にあるように、為房流の中で、嫡流である葉室家との結合する動きが非常に強かったことがあげられる。光頼が、朝隆、親隆、朝隆の子朝方の女子をそれぞれ妻としていることはその表れであるといえるだろう。つまり同族内での内部抗争がほとんどなく、院の政治を支えることに専念できる環境があったのである。こうしたことが院政の中で葉室家が着実に力をのばしてきた大きな要因である。高藤以後、公卿を輩出できず、中小貴族であったこの一門は、白河・鳥羽院政のもとでその勢力を飛躍的に増大させ、政治の大小事に深く関わっていった。顕隆が白河院政において大きな力をふるっていたことは『今鏡』の「夜の閑白」という有名なことばからもうかがいすることができる。また、『愚管抄』には忠実が泰子入内の件で白河院の不興を蒙り、閑白を罷免されたことを受け、白河院は次の閑白を忠実の叔父の家忠を任命することの可否を顕隆に下問している。この時は顕隆が反対したことにより忠通がその地位を受け継ぐことになる⁽⁵⁾が、摂関の地位に関してまで諮問されるということはいかに顕隆が白河院から信任されていたかを物語るものであろう。また、その子の顕頼も久安三年六月三十日、祇園社頭における平清盛の闘乱事件について、清盛と忠盛の配流を求める山門強訴がおきた際、他の公卿とは別に白河院に一人呼ばれ、この件に関して諮問を受けている⁽⁶⁾。単なる実務を行うのみでなく、摂関の人事や、強訴といった非常の際に別に諮問をうけるということは、この一族がどれほど白河・鳥羽院

政において院の信頼が厚かったかという証であろう。ただし、それほどまでに実権を握りながらも驕らず、「良臣国を去る」⁽⁷⁾と評されていることは当時の貴族社会の評価も非常に高かったといえるだろう。こうした院政における葉室家の役割と評価を引き継ぎながら、光頼は登場してくる。

二 『保元物語』『平治物語』の光頼叙述

藤原光頼はその学識の高さは『統故事談』巻二などに見える逸話からしられ、また光頼の剛胆さは、『平治物語』で光頼が信頼の上座に座ったところからもうかがいしることができる。ただし、多くの場面で光頼は、前節で述べたように葉室家の院政における役割と評価を受け継ぎながら、『保元物語』『平治物語』などに登場してくる。

鳥羽殿ヨリ右大将公教卿、藤宰相光頼卿、二人御使ニテ、八条鳥丸ノ美福門院ノ御所へ進セテ、右少弁惟方ヲ以テ、故院ノ御遺誠ヲ申出ル。
(半井本『保元物語』『官軍召シ集メラルル事』岩波書店)

(光頼)「今日、公卿僉議あるべしとて触れられつるあひだ、いそぎはせまいりて侍へども、さして承さだむることもなし。まことにや、光頼は死罪におこなはれるべき人数にかぞへられたりと、つたへ承る。その人々を聞ば、当世の有職、しかるべき人どもなり。その数にいらん事は、はなはだ面目なるべし。さてもそこに、右衛門督が車の尻にのりて、少納言入道が首実検のために、神楽岡とかやへわたられたりける事は、何計、不_レ可_レ然ふるまいかな。近衛大将・検非違使の別当は他にことなる重職也。その職に居ながら、人の車の下にものること、先規もなし。又、当座の恥辱なり。就中、首実検は、はなはだ穩便ならず」とのたまへば、別当、「それは天気にて候しかば」とて赤面せられけり。光頼卿、「こはいかに。天気なればとて、存する旨はいかでか一儀申さざるべき。われらが曩祖、勧修寺内大臣、三条右大臣、延喜の聖代につかへてよりこのかた、君すでに十九代、臣又十一代、承行事は、みな徳政なり。一度も悪事にまじはず。当家はさせる英雄にはあらねども、ひとへ

に有道の臣にとりまひて、讒佞のともがらに与せざりしゆへに、むかしよりいまに至まで、人に指をさゝるゝほどの事はなし。御辺、はじめて暴逆の臣にかたはられて、累家の佳名をうしなはん事、くちおしかるべし。(後略)

(陽明文庫藏(二) 本『平治物語』「光頼卿参内の事付けたり清盛六波羅上着の事」岩波書店)

まず、『保元物語』においては鳥羽院の遺誠を公教とともに美福門院の御所へ送り、惟方に披露させている。こうしたことは前節で述べた院の実務官僚としての働きの表れであろう。またこの他の場面では「將軍塚鳴動并ビ彗星出ヅル事」で公教、顕時などと鳥羽院旧臣として世間の様を談じている。

『平治物語』において、信頼の求めに応じ、謀反に荷担した弟惟方をいさめる場面は、光頼の言葉に表されるように葉室家の一族としての意識の高さが明白である。この『平治物語』における光頼の言葉は前節で述べたような葉室家の役割と評価に合致するものである。すなわち、歴代の天皇の統治に臣下として仕え、支えてきたこと。悪事に荷担することがなかったため、人から誇りを受けることがなかったことなどである。また、光頼が「有職」の人と自負していることは大きな意味を持つ。実務官僚として院内の政治を補佐してきた自負、そしてその実務能力によって認められてきたという自負があるのではないだろうか。この光頼も決して驕らず、権力を志向せず、ひたすら院内に奉仕することに努めたからこそ高い評価を得ているのであろう。「有職」という語は光頼の自負だけではなく、九条兼実も光頼を「有職」の人と評価し⁽⁸⁾ている。では、軍記物語において「有職」という語はどのような場面で用いられているのであろうか。『平家物語』でそれを見ていこう。

延慶本『平家物語』に「有職」という語は2例、「有識」という語は1例ある。

まず、安徳天皇がわずか三歳で即位したことをうけて、一部の人々が即位した年齢があまりに早いと、その御代

はどうなるのだろうか」と不安に感じているという噂をしているのを聞きつけた平時忠が、周の成王が三歳、晋の穆帝は二歳で即位したこと。また、近衛天皇が三歳、六条天皇が二歳で即位したという例をあげ、反論したことをうけて、次のように述べている場面がある。

其時ノ有職ノ人々は、「穴オソロシ。モノイハジ。サレバ夫ハヨキ例ニヤハ有」トゾ、ツブヤキアハレケル。

（延慶本『平家物語』第二中「春宮御譲ヲ受御ス事」勉誠出版）

時忠があげた近衛、六条天皇が若くして亡くなったことを考慮して、「夫ハヨキ例ニヤハ有」という言葉になったのであろう。時忠の言葉は幼年で即位した例としてあがっているが、そうした先例をあげるのみでなく、具体的な内容を熟知して時忠の言葉に対している。その発言者が「有職ノ人々」なのである。

次の用例は、安徳天皇が平家の人々に伴われ、三種の神器とともに西国に落ちたのをうけて、後鳥羽天皇が即位することになった場面で、皇位が空白であった例を挙げた後、述べた言葉である。

而今度ノ詔ニ、「皇位一日不_レ曠」ト被_レ載事、旁不_レ得_二其意_一トゾ、有職ノ人々難申ケル。

（延慶本『平家物語』第四「四宮踐祚事付義仲行家ニ勲功ヲ給事」勉誠出版）

とある。

先例を鑑みると、皇位に空白があったこともあるのに、それを嫌い性急の後鳥羽天皇が即位したことに対しての評であるが、ここでは、単なる批評としてだけでなく、故事先例をあげていることを重視したい。「有職」という言葉

はこの2例であるが、いずれも「有職ノ人々」という形で用いられ、批判的な発言が続くといえるが、単なる感情論で批判するのではなく、故事先例に精通し、その中身を熟知した人物として「有職」という語は用いられているといえる。

最後に、「有職」という語であるが、壇ノ浦の合戦の後、宝剣の行方が不明となり、どれほど搜索させても発見できなかったことをうけて述べた人々に用いられている。

カ、リケレバ、時ノ有職ノ人々申合ケルハ、「八幡大菩薩、百王鎮護ノ御誓不淺、石清水ノ御流尽セザル上ニ、天照大神、月読ノ尊、明ナル光未地ニ落給ワズ。末代堯季ナリト云ドモ、サスガ帝運ノ極レル程ノ御事ハアラジカシ」ト申合ケレバ、

（後略）

（延慶本『平家物語』第六本「靈劍等事」勉誠出版）

「有職」も「有職」と同じく「有職ノ人々」という形で用いられている。宝剣を喪失したものの、八幡大菩薩の百王守護の誓いなどもあるので、存亡の危機というところまでではないと述べているが、「有職」という語とほぼ同じで、物事をよく知った人物として用いられている。

こうした「有職」「有職」という語によって評価される光頼という人物はその人柄も高く評価されている。例えば、『愚管抄』の著者慈円も高い評価を与えている。

光頼大納言カツラノ入道トテアリシコソ、末代ニヌケイデ、人ニホメラレシカ。二条院時ハ、「世ノ事一同ニサタセヨ」ト云仰アリケルヲ、フツニ辞退シテ出家シテケルハ、誠ニヨカリケルニヤ。

（『愚管抄』巻七 岩波書店 三五一頁）

二条天皇の時代、光頼に「世ノ事一同ニサタセヨ」という下命があったかどうかは未確認であるが、こうした命に對し、それを辞退した。すなわち権力に執着しない高潔な人物であつたからこそその評価であらう。こうしたことは『今鏡』にも見える。

このあに、大納言みつよりときこえ給し、四十にだにいくばくもあまり給はざりしに、かしらをろして、かつらのさにとこもりぬ給なれ。それはかやうのことにかゝり給事なく、なに事にもよき人ときゝたてまつりしに、いとあはれにありがたき御心なるべし。

『今鏡』卷三「すべらぎの下」ひなのわかれ 新訂増補国史大系 吉川弘文館

弟の惟方が平治の乱をはじめ多くの政争に関わつていたのに對して、兄の光頼はそうしたことに一切関わらなかつた。何事にも優れた、立派な人物であるという評価である。能力だけでなく、その人柄も高く評価されていることは、為房や顕隆などに通じるものである。

おわりに

藤原光頼は白河・鳥羽院政期に院近臣として成長を遂げた葉室家嫡流の人物である。その葉室家が院政においてどのような役割を担い、また評価を与えられてきたかを考察してきた。光頼の役割、評価は為房を始めとする人々に共通するものである。光頼は軍記物語の中では、それほど多くの登場場面があるわけではない。しかし、『保元物語』での鳥羽院の遺誠に関わる場面、『平治物語』の惟方を誡める場面などは光頼の存在の大きさを物語るものである。当時の世界の中で大きな役割と高い評価を得ていたことが『保元物語』『平治物語』で光頼に重要な位置を付与していったのであらう。

註

- (1) 元木泰雄氏「院の専政と近臣」『院政期政治史研究』思文閣出版 一九九六年
- (2) 橋本義彦氏「勸修寺流藤原氏の形成とその性格」『平安貴族社会の研究』吉川弘文館 一九七六年
- (3) 橋本義彦氏「貴族政権の政治構造」『平安貴族』平凡社 一九八六年
- (4) 元木泰雄氏 註(1)に同じ。
- (5) 『愚管抄』岩波書店 一九六七年
- (6) 新訂増補国史大系『本朝世紀』「久安三年六月三十日条」吉川弘文館
- (7) 増補史料大成『中右記』「大治四年一月五日条」臨川書店
- (8) 『玉葉』「治承五年一月一日条」名著刊行会

(みやがわ ひろたか・関西学院中学部教諭)